

〔研究論文〕

デリーにおけるインド・イスラーム王朝と世界文化遺産

宮原 辰夫

〔Article〕

Indian Islam Dynasties and World Cultural Heritage in Delhi

Tatsuo MIYAHARA

Abstract

It was for about 650 years that Islam dynasties ruled India in history. In the dynasties era, or Delhi Sultanate and Mughal empire, many buildings (forts, tombs and monuments) were built in India. Some of the buildings have been registered as world cultural heritage sites. This paper is to investigate the relation between Islam dynasties and world cultural heritage in Delhi from a historical point of view.

はじめに

インドには現在、ユネスコの世界遺産に登録された文化遺産が23ヶ所存在している。そのうちの6ヶ所がイスラーム王朝時代に建てられたものである。時代の古い順に並べると、①「デリーのクトゥブ・ミナールとその建造物群(Qutb Minār and its Monuments)/1193-1316」、②「フマーユーン廟(Humayun's Tomb)/1560/1-72」、③「ファテール・シークリー(Fatēhpur Sikrī)/1569-74」、④「アーグラ城塞(Āgra Fort)/1632-54」、⑤「タージ・マハル(Tāj Mahal)/1632-1654」、⑥「赤い要塞の建造物群(Red fort complex, Lāl Qilā)/1639-48」となる。

インドにおいて、「中世」のうちの13世紀以降に関する限り、インド・イスラーム王朝はその前半を「デリー・サルタナット」時代、16世紀前半以降を「ムガル帝国」の時代に区分するのが普通である。インド・イスラーム王朝はこの二つの時代に跨って650年近くに及んで西北インドを中心にインド亜大陸を支配していたのである。

「デリー・サルタナット」時代の建造物でユネスコの世界文化遺産に登録されたのは、①の「デリーのクトゥブ・ミナールとその建造物群」の1か所だけである。①以外の文化遺産はすべて「ムガル帝国」時代の建造物である。サルタナット諸王朝の320年近くに及ぶ支配とムガル帝国の330年近くに及ぶ支配の長さを比較した場合、サルタナット諸王朝時代の世界文化遺産の数が極端に少ない。しかし、これはあくまでもユネスコの世界文化遺産の数の比較に過ぎない。墓建築や遺跡の数においてムガル帝国はサルタナット時代にはるかに及ばないという指摘もある。⁽¹⁾

本論文は、インド・イスラーム王朝を「デリー・サルタナット」と「ムガル帝国」の二つの時代に分けて、デリーを支配していたイスラーム諸王朝と世界文化遺産やその他の建造物(城砦)の関係について、当時インドに滞在し、王朝に仕えていたアラブ人大旅行家イブン・バットゥータやフランス人医師フランソワ・ベルニエ、イギリスの旅行家たちの回想記(旅行記)などを手掛かりに考察することである。そして、インド・イスラーム王朝の世界文化遺産のもつ連続性と非連続性、宗教文化の混交・融合とその独自性を歴史を通して明らかにすることである。

1. 「デリー・サルタナット」時代の世界文化遺産

「デリー・サルタナット」とは、北インド一帯(デリー中心)を支配したイスラーム諸王朝を指しており、ムスリムのスルターン(君主)が支配しているところから、インド史の上では「サルタナット *saltanat, the sultanate*」と呼ばれることが多い。「デリー・スルターン朝」「デリー諸王朝」とも総称される。

「デリー・サルタナット」を王朝名によって時代区分してみると、図1のような分類になる。これらの5王朝のうちの最後のローディー朝の支配層の多くが、アフガン系諸部族であるのに対して、それに先立つ他の4王朝の支配層の大半がトルコ系諸族に属している。こうした支配層の民族・部族の違いがのちの建造物の造営にも少なからず影響を与えている。

「デリー・サルタナット」時代において、文化遺産としてユネスコ世界遺産に登録されているのは「デリーのクトゥブ・ミナールとその建造物群」(1993年登録)だけである。この建造物を創建したのは、インドで最初のイスラーム系王朝である奴隷王朝を創始したトルコ系ムスリムのクトゥブッディーン・アイバク *Qutb al-Dīn Aibak* (在位 1206-1210) である。その後、第3代スルターンのシャムスッディーン・イルトゥトミシュ *Shams al-Dīn Iltutmish* (在位 1211-36) によって約3倍に拡張(第1次拡張)され、さらにハルジー朝の第2代皇帝スルターン・アラウッディーン・ハルジー *Alā ad-Dīn Khaljī* (在位 1296-1316) によって、原初の約11倍にまで増築・拡張(第2次拡張)された。こうして「クワットゥル・イスラーム・マスジッド *Qūwwat al-Islām Masjid* (イスラームの力のモスク)」と呼ばれる、デリー最古の大モスクが誕生したのである。それはデリーにおけるムスリム人口の増大と無関係ではない。⁽²⁾

図1 デリー・サルタナットの代表的スルターン

王朝とスルターン	時代区分(在位)	世界文化遺産と他の建造物
1. 奴隷王朝(トルコ系)	1206-1290年	
①クトゥブッディーン・アイバク	(在位 1206-10)	・「クトゥブ・モスク」「クトゥブ・ミナール」創建
③シャムスッディーン・イルトゥトミシュ ⑨ギヤースッディーン・バルバン	(在位 1211-36) (在位 1266-87)	・「クトゥブ・モスク」約3倍に拡張。
2. ハルジー朝(トルコ系)	1290-1320年	
①ジャラルッディーン・ハルジー ②アラウッディーン・ハルジー	(在位 1290-96) (在位 1296-1316)	・スィーリー城砦建設。 ・クトゥブ・モスク原初の約11倍に拡張。「アラウイー門」「アラウイー・ミナール」建設
3. トゥグルク朝(トルコ系)	1320-1413年	
①ギヤースッディーン・トゥグルク ②ムハンマド・ビン・トゥグルク	(在位 1320-25) (在位 1325-51)	・新首都トゥグルカーバード建設着手 ・西デカンに第2の首都(ダウラターバード)建設
③フィローズ・シャー・トゥグルク	(在位 1351-88)	・フィローザーバードの新都建設
4. サイド朝(トルコ系)	1414-1451年	
①ヒズル・ハーン	(在位 1414-21)	
5. ローディー朝(アフガン系)	1451-1526年	
①バハロール・ローディー ②スィカンダル・ローディー ③イブラーヒーム・ローディー	(在位 1451-89) (在位 1489-1517) (在位 1517-26)	・スィカンドラ新都建設

デリー最古の大モスク、「クーワットゥル・イスラーム・マスジッド」の完成までのプロセスをその建造に関わったスルターンとその広さによって大きく3つに分類することができる。1つはアイバクが創建した「クトゥブ・モスク *Quṭb Mosque*）」と「クトゥブ・ミナール *Quṭb Minār*」、そしてクトゥブ・モスク内にある鉄柱 (*Iron Pillar*) である。2つ目はイルトゥトミシュが拡張したクトゥブ・モスクである。3つ目はアラーウッディーン・ハルジーが「アラーイー・ダルワザー *Alāi Darwāzah* (アラーイー門)」と「アラーイー・ミナール *Alāi Mirār*」、そしてマドラサである。

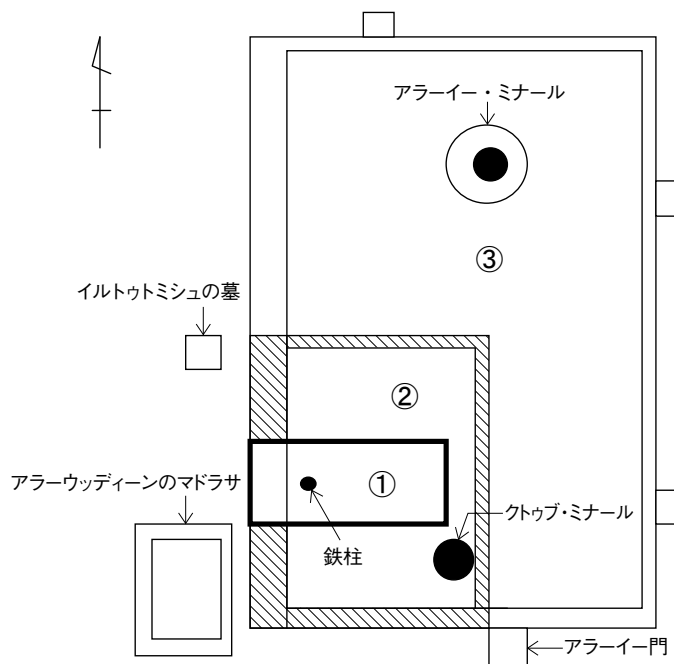


図2 デリーの大モスク(クーワットゥル・イスラーム・マスジッド)の平面図
イブン・バトゥー(家島彦一訳注)『大旅行記4』(平凡社、349頁)に掲載の図を参考に
加筆したもの。①クトゥブッディーン・アイバク、②イルトゥトミシュ、③アラーウッ
ディーン・ハルジー

(1) クトゥブッディーン・アイバクのクトゥブ・モスクとクトゥブ・ミナール

クトゥブ・モスクとクトゥブ・ミナールの中核となる部分(1192-98年)は奴隷王朝の初代スルターン、クトゥブッディーン・アイバクによって創建されたものである。アイバクはゴール朝(アフガニスタン東部のゴールを中心とした王朝)の王ムハンマドのトルコ系奴隷出身の武将であった。⁽³⁾ 北インドの統治を任されていたアイバクは、王ムハンマドが暗殺されると、北インド領の支配者となった。アイバクがデリーの支配者として行ったのは、ムスリムの義務であるモスクの建設と勝利者の威信のシンボルとしてのモニュメント、ミナールの創建であった。

当時、モスクが建てられた場所はヒンドゥー教やジャイナ教の寺院が立ち並んでいたようである。クトゥブッディーン・アイバクはそれらを破壊し、その際に得られた石材を再活用してモスクやミ

ナルを築いたと言われる。勿論、イスラームでは偶像崇拜が禁じられているので、装飾的な柱の偶像的な部分だけは削り取られている。(4) イブン・バトゥータのクトゥブ・モスクに関する記述は、こうした事実を裏付けるものとなっている。

「またモスクの諸門のうちの東門には、実に巨大な二つの青銅製の偶像があって、地面に伏せた姿で石に固定されている。モスクに入る人も出て来る人も、皆がその二つの偶像の上を踏みつけていく[のが習わしである]。このモスクの場所は、もともとはブドハナ、つまり偶像の家(仏堂)であったが、[デリーの町が]征服された時に、モスクに変えられた」(5)

アイバクの創建したクトゥブ・モスクの回廊内の中央に、場違いとも思える鉄柱が一本立っている。古代インドの統一王朝、グプタ王朝(320-550頃)時代の5世紀頃のスタンパ(記念柱)が移設されたものと言われる。なぜこの場に移設されたのか。想像の域を出ないが、興味深い事実が残っている。トゥグルク朝のフィローズ・シャーはインドの過去の歴史や文化に対して多大な興味を持っていた。あるとき、メーラトとトープラーでアショーカ王柱を見てすっかり魅せられ、それらをデリーに運ばせた。その1本をよく目につく城砦の屋上に建てた。その銘文に何が書いてあるか知っていたが、アショーカ王の時代以後に文字が変わってしまい、誰も読むことができなかった。彼はそれが呪文であり、宗教儀礼に関係あるものと考えていた。(6) 今日でもニューデリー東部地区の遺跡公園「フィーローズ・シャー・コートラ」の中にそれは残っている。

イブン・バトゥータもこの「鉄柱」に関心を寄せており、次のような説明を行っている。「大モスクの中央部には如何なる金属を使ったか分からないが、一本の荘重な円柱がある。それについて、彼らの博学の賢者たちの一人が私に語ったところによると、それは[ペルシャ語で]〈ハフト・ジュージュ〉と呼ばれており、その意味は〈七つの金属〉のことで、そうした材料から造られているという。」(7)

イブン・バトゥータだけでなく、ムガル帝国の初期に北西インドを旅行したイギリス人たちも興味を持っていたようである。その旅行家の一人、コーリヤット(Thomas Coryat)は、デリーのクトゥブ・モスクの前の「鉄柱」に刻まれた文字は、ギリシャ語で書かれてのものであると確信していた。(8) 勿論、この「鉄柱」はグプタ王朝期のものであるが、こうした誤謬の背景には、「アレクサンダーの伝説」がすでにヨーロッパにおいて信じられていたからである。インドは、アレクサンダー大王によって征服され、後に聖トマスの国となり、またプレスター・ジョンが国王として君臨した国であった。(9) またマルコ・ポーロの『東方見聞録(世界の記述)』の中で、インドに寄港したさいに、使徒聖トマスの墳墓に立ち寄った記述が残っていることからそれはうかがえる。(10) アレクサンダー大王こそ、ギリシャ文化を継承し、その文化を携えて東方遠征を行い、インドを征服した人物であると信じられていたことを考えれば、「鉄柱」にギリシャ語で銘文が刻まれていると当時のイギリス人旅行家たちが信じるのも不思議なことではない。

クトゥブ・モスクの南東には、やはりクトゥブッディーン・アイバクによって1200年に着工された、インド最大・最古のクトゥブ・ミナールが建っている。そもそもミナールとはミナレット(尖塔)のことで、本来はモスクに付随しており、その上から信徒への礼拝の呼びかけ(アザーン)をする塔である。しかし、このミナールはアイバクがデリーを陥落した後、勝利を記念する象徴的なモニュメントとして建てたものである。異教の地を征服した新支配者の威信をはるか遠くまで知らしめるには十分すぎるほどの巨大な塔である。その基部の直径は14.3m、高さは72.5mあり、内部は象3頭が同時に登れるほどの広い螺旋階段を備えており、外観は5層よりなり、各層にはバルコニーがつけられている。イブン・バトゥータも天に高く聳えるクトゥブ・ミナールを見てさぞ驚いたことであろう。その印象を彼は次のように記述している。

「モスクの北側の広場には、イスラム諸国では他に類を見ない一つのミナレットがある。それは、モスクの他のすべての部分の石とは違って、赤色の色で建てたものである。なぜならば、一般にミナレットは、[すべて]白い[石から出来ている]からである。しかも、そのミナレットの石には、文字が彫り込まれている。それは、天を突くように聳え、ミナレットの塔頂[に載せた装飾物、相輪]は白亜に輝く大理石で造られ、そのリング状の球体部(宝珠)は、純金製である。その通路の幅は、象がそこを登って行けるほどの幅である。信頼出来る人が私に語ったところによると、それが建設された当時、象が石を運んでその天辺に登って行くのを、その人は実際に見たという。」⁽¹¹⁾

クトゥブ・ミナールのモデルとなったのは、アフガニスタンのジャームのミナレットだと言われている。⁽¹²⁾ そもそもクトゥブッディーン・アイバクは、アフガニスタン東部のゴール朝の王ムハンマドのトルコ系奴隷出身の武将であったことを考え合わせれば頷けるものと言える。

(2) シャムスッディーン・イルトゥトミシュ

クトゥブ・モスクとクトゥブ・ミナールはアイバクの奴隷出身の武将で、第3代のスルターンとなったシャムスッディーン・イルトゥトミシュ(イレトゥミシュ、ラルミシュともいう)によって約3倍に拡張された。イルトゥトミシュが行った第1次拡張工事はミナール(3層)を完成させ、それをクトゥブ・モスクの回廊内に取り込む形で行われている。

イルトゥトミシュはクトゥブッディーン・アイバクのマムルーク(奴隷)であると同時に、彼の軍隊長、副官であった。アイバクが亡くなると、その支配権を掌握し、第3代の王(スルターン)の座に就いた。デリーに統治権を確立し、奴隷王朝の基礎を築いた人物である。イルトゥトミシュの人物像について、イブン・バットゥータは、「彼の治世は、20年間であり、[統治において]公正な人、善行に勤しむ信徒、そして卓越した人物でもあった」「彼の残した賞賛すべき行動としては、彼は神の道を逸脱した不正行為に対して厳しき立ち向かい、一方、[不当な仕打ちを受けて]犯罪者[と見做された人]たちが公平に裁かれることに努力したことである」と書き残している。⁽¹³⁾

イルトゥトミシュの死後、娘ラズィヤRaziya(在位1236-40)が皇帝位に就いた。女性即位はインド史上では珍しいことであった。それだけに、女性が皇帝位に居続けることがいかに難しいことであったか、そのことをイブン・バットゥータの旅行記から読み取ることができる。

「彼女は4年間にわたって王権を維持した。その間、彼女はいつも男たちと同じように、弓、矢筒(ティルカシュ)や小型の服(キルバーン)を持って馬に跨り、顔には覆い布さえ被らなかつた。その後、彼女の所有するエチオピア人との仲が疑われたため、人々は彼女を廃位させて、結婚させることで一致した。その結果、彼女は廃位させられ、彼女の親戚の一人と結婚した。そして、彼女の弟ナーシル・ウッディーンが王位に就いた。」⁽¹⁴⁾

ラズィヤは王にふさわしいすべての資質を兼ね備えていたが、男性として生まれてこなかつたが故に、女性であることと王国の統治を独占したことの双方から反感を買い、最後には農夫に殺されるという不運な死を遂げた。⁽¹⁵⁾

(3) スルターン・アラーウッディーン・ムハンマド・ハルジー

クトゥブ・モスクとクトゥブ・ミナールはハルジー朝の第3代皇帝スルターン・アラーウッディーン・ムハンマド・ハルジー(在位1296-1316)によって、原初の約11倍にまで増築・拡張(1296-1316)された。その拡張された大モスクの回廊内には、第2のクトゥブ・ミナール、つまりアラーイー・ミナールが造営され、さらにアラーイー・ダルワーザー(門)が設けられ、マドラサも付設する大モス

クとなった。増築・拡張された大モスクの状況を、イブン・バットゥータは次のように語っている。

「さらに、スルタン＝クトブ・ウッディーンは、西側の広場のところに、それより大きいミナレットを建設したいと思ったが、彼はその三分の一を建てたところで、完成を待たずして亡くなった。続いて、スルタン＝ムハンマドはそれを完成させようとしたが、[占いの結果]凶兆であると出たので、それを中止した。この[未完成の]ミナレットは、規模の大きさの点で世界の不思議の一つであり、[上に登る]その通路の横幅は、象三頭が並んで登れるほどの広さである。この三分の一の[未完成の]建物は、先に述べた北側の広場にあるミナレット全体の高さと同じ。」⁽¹⁶⁾

明らかにこの説明は誤っている。「アラーイー・ミナール」を造営したのは、スルタン＝クトブ・ウッディーンではなく、第3代皇帝スルターン・アラーウッディーン・ムハンマド・ハルジーである。またスルターン・ムハンマドもアラーウッディーン・ムハンマドの間違いであると、家島彦一は訳注の中で指摘している。⁽¹⁷⁾

アラーウッディーン・ムハンマドは、ヒンドゥー諸勢力を制圧するために南インド各地に遠征軍を送るなど、野心的で強引なその拡張政策を行ったために「アレクサンダー2世」と呼ばれていた。こうした大モスクへの拡張は、アラーウッディーン・ムハンマドの野心の一つの表れと見ることができる。イブン・バットゥータも、アラーウッディーン・ムハンマドの人物評を「アラーウッディーンは、行動力があって、勇猛果敢であり、つねに勝ち運に恵まれていたので、王権への野望に燃えていた」と記述している。⁽¹⁸⁾ 叔父で義父でもあったスルターン・ジャラルウッディーンを殺し、王の座に就き、野心的で強引ともいえる遠征を敢行したアラーウッディーンの行動は、確かに「アレクサンダー2世」と呼ばれるにふさわしいものであったと言える。⁽¹⁹⁾

アラーウッディーンの死後、ハルジー朝は急速に弱体し、トゥグルク朝に取って代わられた。トゥグルク朝は、デリー・サルタナットの王朝の中で最盛期の王朝と言われ、とくに第2代のスルターン、ムハンマド・シャー・トゥグルクはインド南端部まで征服し、最大版図を実現した。ムハンマド・シャー・トゥグルクは初代スルターンで叔父のギヤースウッディーン・トゥグルクが着手したトゥグルカーバード城砦を造営したが、そこを短期間で放棄し、デカン西北部に位置する旧デーオギリの地に、第2の首都「ダウラターバード(富の町)」を建設し、そこに首都デリーの支配層、富裕者たち、学識者、大商人など都市の上層社会の人々の多くは強制的に移住させられた。⁽²⁰⁾

ムハンマド・シャー・トゥグルクがデリーの住民を町から強制的に立ち退かせた理由について、その当時デリーに滞在し、現地のカーディー(法官)に任ぜられていたイブン・バットゥータは次のように述べている。「デリーの住民はしばしば、スルターンを侮辱し誹謗する内容を含む幾つもの紙片を書いて封印し、その表に『世界の御主人様の頭にかけて、これは彼(スルターン)以外は読むべからず!』と書いて、夜間の謁見の間に投げこみ、その文書の内容を見つけたスルターンは、デリーを破壊することを決意した」。⁽²¹⁾ もちろん、首都の移転と住民の移住計画という大事業が、スルターンの一時的な怒りや思いつきで実行されたとは考えにくい。⁽²²⁾

こうした新都城砦の造営はその後も続いた。3代スルターンのフィロズ・シャー・トゥグルクもデリーに新城砦都市、フィーローザーバードを建設している。トゥグルク朝後に興ったサイド朝を除けば、ローディー朝のシカンダル・シャー・ローディーもアーグラ北西の地にシカンドラという新都市を建設している。デリー・サルタナット時代を通して、まさに新都市建設のラッシュとも言える。しかし、なぜ簡単に新都市の建設が可能であったのか。デリーやアーグラの都について、ベルニエは次のように述べています。

「デリーやアーグラのような都は、町全体がほとんど軍隊の需要だけで暮らしを立てており、こ

のため、王がしばらく都の外に出かけるような時には、その後について行かざるを得ないのです。こういう町はパリなどとは全然違いますし、パリのようになることもできません。本来、(デリーやアグラの都は)軍隊の基地であり、何もない野原よりはましで、便利にできているだけです」。(23)

ベルニエが記述しているように、デリーやアグラの城砦都市は軍隊の基地であったと考えれば、確かに多くの城砦都市が出来ても不思議なことではない。言い換えるならば、軍隊の基地として建設された城砦都市はヨーロッパのような都市機能を持たないだけに、支配地の拡大や水不足のために、あるいは兵士に給料を払うだけの財貨を獲得できないために容易に放棄され、瓦礫の塊と化し、いずれ消滅していく運命であったともいえる。

2. ムガル帝国の世界文化遺産

ムガル帝国の歴史を俯瞰すると、その諸皇帝の盛衰によって創始期・最盛期・衰退期と大きく3つに分けることができる。ムガル朝を創設した初代皇帝バーブルと第2代皇帝フマーユーンの時代のムガル帝国創始期(1526-56)と、ムガル帝国の支配体制を確立した第3代皇帝アクバルから第6代皇帝アウラングゼーブまでの最盛期(1556-1707)、そして最後に第6代皇帝アウラングゼーブ死後の短命皇帝時代から最後の第17代皇帝バハードゥル・シャー2世(在位1837-58)までの衰退期(1707-1858)の3つである。

図3 ムガル帝国の代表的な皇帝

王朝と皇帝	時代区分(在位)	世界文化遺産とその他の建造物
1. ムガル王朝(トルコ系)	1526-40年	
①バーブル	(在位1526-30)	(ムガル帝国創始)
②フマーユーン	(在位1530-40)	・ プラーナー・キラール城砦の造営着手
2. スール朝(アフガン系)	1538-45年	
①シェール・シャー	(在位1538-45)	・ プラーナー・キラール城砦完成
3. ムガル朝(トルコ系)	1320-1413年	
②フマーユーン	(在位1555-56)	・ プラーナー・キラール改築
③アクバル	(在位1542-1605)	・ フマーユーン廟造営
④ジャハーンギール	(在位1605-28)	
⑤シャー・ジャハーン	(在位1628-58)	・ ジャハーンギール廟 ・ タージ・マハル造営 ・ アグラ城の増改築 ・ デリーに新都市(シャージャハーンナバード)建設
⑥アウラングゼーブ	(在位1658-1707)	
⑰バハードゥル・シャー[2世]	(在位1837-1858)	(ムガル帝国最後の皇帝)

ムガル帝国の3つの時代と世界文化遺産を重ねてみると、「フマーユーン廟(Humāyūn's Tomb)/1560/1-72」、「アグラ城(Āgra Fort, 1564-75)」、「ファテプル・シークリー(Fatēhpur Sīkrī)/1569-74」、「タージ・マハル(Tāj Mahal/1632-1654)」、「赤い要塞の建造物群(Red fort complex, Lāl Qilā)/1639-48」など、そのすべてがムガル朝最盛期に集中している。ムガル帝国時代の世界文化遺産の5つのうちの2つ、つまり最盛期の第3代皇帝アクバルにより建造された「フマーユーン廟」と第5代皇帝シャー・ジャハーンによって建設された「赤い要塞の建造物群(ラール・キラール)」だけが首都デリーにある。勿論、創始期の第2代皇帝フマーユーンが着手し、スール朝のシェール・シャーがそ

のほとんどを完成させた「ブラーナー・キラー」は重要な建造物ではあるが、世界文化遺産にはなっていない。

(1) ムガル帝国創始期の世界遺産

インドにムガル朝を創設したバーブル(Zahīr al-Dīn Bābur, 1483-1530/在位1526-1530)は、中央アジア・トルコ系、ティムールの子孫であった。バーブルの幼少期には、中央アジアのサマルカンドを都としていたティムール帝国(1370-1507)はすでに凋落の一途を辿っていた。バーブルの夢が中央アジア・サマルカンドの支配者となってティムール帝国の栄光と威信を取り戻すことにあったとしても決して不思議なことではない。実際、バーブルはサマルカンドを3回征服している。だが、3回とも奪われ、結局サマルカンドにティムール帝国を再興することはできなかった。以後中央アジアへの活動の道は完全に閉ざされたが、アフガニスタン(カーブル)に拠点を築くと、6回にも及ぶインド遠征を行っている。バーブルはインドの地にティムール朝のような帝国の実現を夢見ていたのであろうか。

インドへの遠征(侵攻)はバーブルに始まったわけではない。ティムールもまたモンゴル帝国の再興をめざして大遠征を行っている。その中には、インド遠征も含まれていた。1398年、ティムールは自ら騎兵の大軍を率いてインドに侵攻し、デリー滞在わずか10日余りで、恐ろしいほどの略奪と虐殺、破壊の限りをつくし、膨大な戦利品と多数の捕虜と優れたインド人職人・技術者を引き連れ、サマルカンドに帰還した。彼のインド侵攻は、後の歴史家から「有史以来最大の虐殺事件」と言われ、その結果、当時のトゥグルク朝に甚大な被害を与え、トゥグルク朝崩壊の原因になったと言われる。⁽²⁴⁾

ティムールのインド遠征はインドをモンゴル帝国の再興の地としてではなく、単に財貨の略奪が目的であったといえる。バーブルにとってもインド遠征は、ティムール同様、単に財貨を略奪することが目的であったのであろうか。10世紀以降のインド亜大陸では、今日のアフガニスタン地方にいたトルコ系諸民族が、西北および北インドへの侵入を繰り返していた。都市に侵入し、略奪の限りを尽くし、帰還するというパターンは何度も外来異民族によって踏襲されてきたものであった。⁽²⁵⁾ 侵入・征服した地域にとどまり、その地域を拠点として支配権をインド域内で確立・維持してきたのが「デリー・サルタナット」時代であった。バーブルのムガル帝国もまた、侵入・征服し、定住・支配という方策を採ることになるが、インド遠征の当初からそう考えていた訳ではなかったようである。

バーブルは20年の間(1505～1525年)に6回ものインド遠征を行っている。文武の才に優れていたバーブルは、後のトルコ散文学史上最高の傑作される回想録『バーブル・ナーマ』を残している。その訳本の中で、バーブルのインド遠征の目的について訳注者の間野英二は次のように説明している。

「しかしカーブルは、モグール(モンゴルという語のペルシア語化した形)らが加わって多勢となったバーブルの軍勢を養うには十分な土地ではなかった。このためバーブルは、1505年1/2月、略奪と戦利品獲得を目的に第1次ヒンドゥスターン遠征に向かい、この時初めて、中央アジアとは全く異なったインドの風物を目にして、驚異の思いを禁じ得なかった」。⁽²⁶⁾

バーブルのインド遠征当初はあくまでも略奪と戦利品獲得が目的であったことは明らかである。ところが、ローディー朝の君主イブラーヒームの叔父アラム・ハーンから、君主イブラーヒームに対する戦いに援軍として加わるよう要請があると、この要請に応える形で、バーブルは第5次・6次インドの遠征を行っている。その結果、バーブルはこれまでの略奪を目的としたインド遠征と

は性格を異にするインド遠征を計画することになった。(27)

インドに第6次遠征したバーブルは、1526年のパーニーパットでデリーのローディー朝の君主イブラーヒームの軍勢を撃破して、デリーとアグラを占領した。ここからインド遠征の目的が「略奪」から「支配・定着」へと本格的に展開することになるが、そこに至る道のりは平坦なものではなかった。とりわけバーブルに最もインドを嫌悪させたのは、インド人のもつ美への欠落、混沌さ、不規則と不調和であったのかもしれない。勿論、気候の厳しさは言うに及ばない。インド(ヒンドゥスターン)の欠点について次のように述べている。

「ヒンドゥスターンは長所の少ないところである。人々の中に美しい者は見られない。楽しい交際もお互いの行き来もない。才も知力もない。礼儀作法もない。寛大さも恵み深さもない。芸術や手仕事においても、整然さも形も、縦横のシンメトリカルな線もない。名馬もない。すぐれた犬もない。ぶどうもメロンも、うまい果実もない。氷もない。冷たい水もない。パーザールにも、よい料理もよいパンもない。公共浴場もない。マドラサもない。」「大河や谷や溪谷の中を流れている水の澄んだ川を除いて、庭園や建物には人工的な水路がない。また建物には、快適さや自然環境の良さ、秩序や調和がない」。(28)

その一方で、インドの長所にも触れている。「大きな国である。金銀が豊富である。雨季の気候は非常に快適である。」「もう一つの長所は、あらゆる種類の職人が無数・無限にいるという点である」と述べている。(29) あまりにも欠点の部分だけが強調されたために、バーブルには自らインドの地を好まなかったという印象を定着させたという指摘もある。(30) むしろインドのもつ潜在的な豊かさに気づきはじめ、次第にこの地にティムールを再興する新たな帝国を打ち立てたいと思うようになったのではないか。

インド人の美意識や気候以上に、バーブルを苦しめたのは、インドの支配・服従の難しさであった。デリーを征服し、アグラに入城したものの、バーブルが支配していたのはデリーとアグラのわずか2都市のみで、周辺の諸勢力はまだ服属していなかった。厳しい暑さのために、アグラ征服後に多くの者が一度にばたばた倒れ死に始めた。こうした状況下で、バーブルの軍中にはカーブル帰還を望む声が充満していた。バーブルはベグ(beg, トルコ系の軍事指導者の称号)全員を招集して、次のように述べて、ベグたちの不安を取り除こうとした。

「統治や支配は手段・方策なしでは成功はおぼつかない。君主やアミールの仕事は家臣や領地なしでは不可能だ。私たちは何年も努力して苦労を重ね、遠い道りを一步一步進んで行軍し、私たち自身と兵士たちを戦いの危険にさらして来たのではなかったのか。神のご加護により、私たちはこのような多数の敵を破り、このような広大な国を征服できたのではなかったのか。いま、このように懸命になって征服した諸地方を何の理由もなく放棄するどんな必然性や必要性があるのだろうか。またカーブルにもどって貧困の苦しみを味わい続ける必要がはたしてあるであろうか。以後、私の味方である者は誰であれあのような事を云ってはならぬ。我慢できずに去りたいと思う者は誰であれ行った所からもどって来るな」(31)

こうしたバーブルの説得にもかかわらず、インドを嫌ってカーブルに帰る気持ちを変えぬ者もあり、バーブルの親友ホージャ・カラーンもカーブルへと去った。(32) むしろこのことで、バーブルと目的を同じくするベグの強固な集団、いわゆるムガル朝が形成されていったともいえる。この頃から周辺諸地域のバーブルへの臣従が続き、領土は拡大していった。

初代皇帝バーブルの死後、第2代皇帝に就いたのはバーブルの長子、フマーユーン(Naṣir al-Dīn Muḥammad Humāyūn, 1508-56/在位 1530-40, 55-56)であった。フマーユーンは幼少期からバーブル

に溺愛されていた。バーブルがまだインドを征服する前のことであるが、長子フマーユーンはバダフシャーの統治者として派遣された。当時、14・15歳(満12・13歳)の少年に過ぎなかったフマーユーンを心配し、バーブルは妃マーヒム・ベギムを伴い赴任先まで付き添って行ったほどであった。⁽³³⁾ また、インド征服後、溺愛した息子フマーユーンが重い病にかかると、バーブルは「ムハンマド・フマーユーンよりも大事なものは、私の命のみだ。私は私自身を喜捨しよう。神がお受けとり下さらん事を」と神に誓いを立てたほどであった。⁽³⁴⁾ 奇跡的にフマーユーンは回復したが、肉体の衰えに心労が重なり、ついにバーブルはアグラで亡くなった。

フマーユーンは即位の直後、デリーの地に新たな城砦の造営に着手したが、北インドのアフガン勢力を結集したスール勢力の武将、シェール・シャー(Shēr Shāh/在位1538-45)によってデリー、アグラは奪われ、ペルシアの地に追いやられ、首都造営の目的は実現されず、ムガル帝国も一時中絶することになる。しかし、スール朝の初代君主となったシェール・シャーは、宿敵フマーユーンが着手した新都造営事業を受け継ぎ完成させた。今日、「プラーナー・キラ Purānā Qilā(古い城)」の名で知られる城砦がそれにあたる。広大な城砦の内庭には、八角形の「シェール・マンデル Shēr Mandel」という小さな建物とアフガン風に建てられた「キライー・クナ・モスク Qilā-i-Kuhna Masjid」が離れて鎮座している。

北インド(デリー、アグラ)を追われたフマーユーンは放浪の末、イランのサファヴィー朝タフマースプのもとに身を寄せていた。しかし、スール朝の宮廷内部の抗争が起こると、その混乱に乗じて、サファヴィー朝の支援を受けて北インドに進軍し、1555年にデリーを占領した。再即位したフマーユーンは、シェール・シャーの造営した大城砦を占領し、その内部を改修し宮廷を設けた。しかし支配して間もなくして、フマーユーンは図書館(「シェール・マンデル」)の階段から滑り落ちてこの世を去った。フマーユーンは歴史的な建造物を残すことはできなかったが、ペルシア細密画の流れを汲むムガル絵画(細密画)をインドにもたらした。

(2) ムガル帝国最盛期の世界文化遺産

アクバルは、父フマーユーンがシェール・シャーによってインドの地を追われ、インド西端を転々と放浪するなかで生まれた。フマーユーンが再び皇帝に就いて間もなく、事故で亡くなると、アクバル(Jalāl al-Dīn Akbar, 1542-1605/在位1556-1605)は弱冠13歳で第3代皇帝として宣言された。

父アクバルから溺愛され、その後インドを追われ、転々と流浪し、艱難辛苦の人生を歩み、その結果、不慮の死を遂げた父フマーユーンをアクバルはどのように見ていたのであろうか。皇帝フマーユーンの死後、その墓とモスクに隣接する地に、インドの墓建築造営史上、初めての大規模な墓が造営されたのである。しかもそれは、ほかならぬ皇帝フマーユーンの墓廟であった。

フマーユーン廟は、広大な四分庭園(チャハル・バグ)の中央に建つ巨大な墓廟である。建物は、完璧な左右対称性を備え、広大なその基壇の上には大きな大理石のドームを頂き、その周りにはチャトリと呼ばれるあずまや風の小さな建物が付いている。⁽³⁵⁾ バーブルが、インドには「芸術や手仕事においても、整然さも形もなく、縦横のシンメトリカルな線もない」「大河や谷や溪谷の中を流れている水の澄んだ川を除いて、庭園や建物には人工的な水路がない。また建物には、快適さや自然環境の良さ、秩序や調和がない」と嘆いていたことを考えると、まさにフマーユーン廟はバーブルが思い描いていた美しい理想郷が息子のフマーユーンへ孫のアクバルへと継承され具現化された建造物(庭園や墓廟を含む)であったかもしれない。⁽³⁶⁾ この墓廟が、以後のムガル朝の墓建築のプロトタイプとなり、タージ・マハルの祖型となったと言われる。

フマーユーン廟は誰が造営したのかについて諸説がある。フマーユーン廟のペルシア人妃ハージ・ベークムが造営したという説もあるが、着工が始まったのが1561/2年で、1572年に完成したと考えれば、アクバルが皇帝としてインド各地の平定と統治機構の確立に乗り出し、1560年代後半には新都アーグラ建設に精力を傾けていた時期と重なる。こうした歴史的事実からアクバル大帝によって建造されたものだという説もある。⁽³⁷⁾ ただ、信仰心の篤かった妃ハージ・ベークムがアクバルにフマーユーン廟の建設を懇願したとしても決して不思議なことではない。現在、フマーユーン廟の入り口の史跡案内板には、死を悼む未亡人、ハミード・バーヌー・ベークム(ハージ・ベークム)がこれを建造したと書いてある。

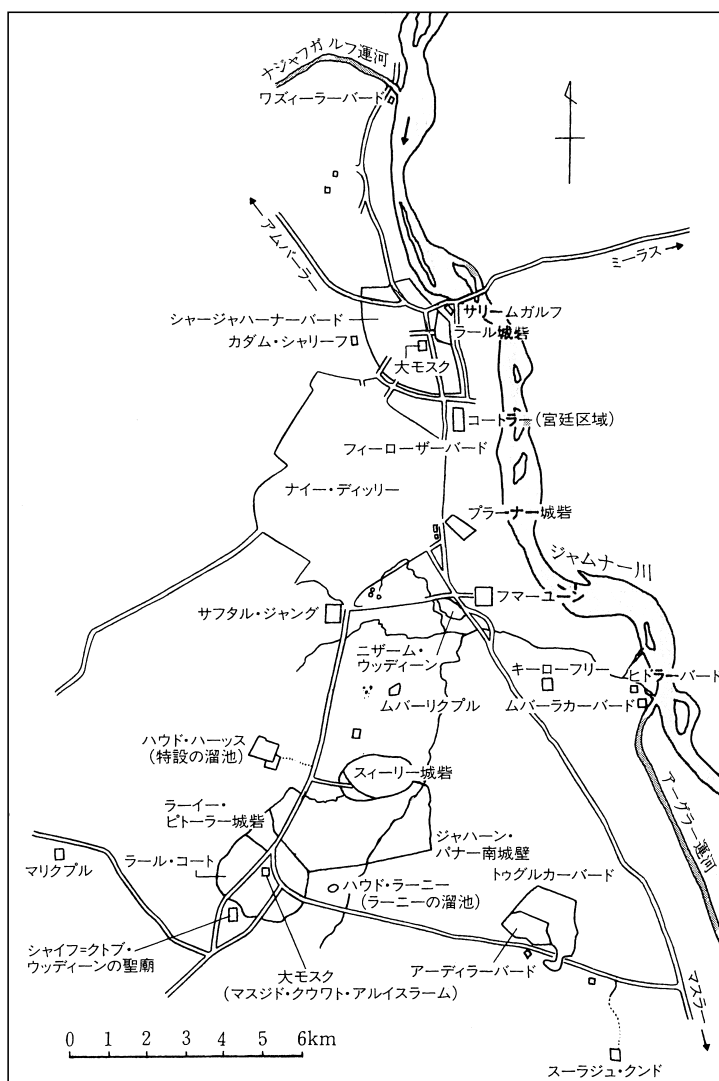


図4 デリーイスラーム王朝時代のデリーの首都

(図の典拠：イブン・バットゥータ(家島彦一訳注)『大旅行記4』(344頁)より)

アクバルがアグラやファテプル・シークリーにその首都を移してからのは、デリーにおいては首都建設にかかわる工事は行われなかった。帝国最盛期の基盤を整えたムガル3代皇帝アクバルも、首都デリーの変遷の歴史のなかでは目立った役割を演じてはいない。その点では4代皇帝ジャハーンギール(Jahāngīr/在位1605-27)も同じで、デリーの拡大と発展の歴史にはほとんど無関係のまま終わっている。⁽³⁸⁾

デリーに新たな首都が建設されるのは、5代皇帝シャー・ジャハーン(Shāh Jahān/在位1628-58)の治世になってからである。シャー・ジャハーンは、父ジャハーンギールの死後、王位継承をめぐる争いを制し皇帝の座に就いた。ムガル皇帝の中でも、シャー・ジャハーンほど多くの建造物が建てた者はいない。ジャハーンギール廟(ラホール)、ムムターズ・マハル廟(通称「タージ・マハル」、アグラ)、アグラ城(ラル・キラー)の増改築など、インドでは知らない者はいないほど有名な建造物である。

荒松雄は、とくにデリーに建設された新首都について、「その規模においてサルタナット時代の諸城市をはるかに凌駕し、しかも、かなりの計画性をもって造られた。デリーやインドの他地域ばかりか、世界史上の著名な城砦都市と比べても、引けを取らない」と高い評価を与えている。⁽³⁹⁾ その新城砦都市は、シャー・ジャハーンの名に因んで「シャー・ジャハーン・ナバード(シャー・ジャハーンの町)」と呼ばれ、そのほぼ中央に壮大なジャーマー・マスジッドが建てられ、その東北隅には宮廷城砦(1638-1648)が造営されている。

フランス人旅行家フランソワ・ベルニエは「シャー・ジャハーン・ナバード」の印象について、次のように書き残している。「広々とした平野の中に位置し、ジャムナ河と呼ばれる、我々のロワール河に比すべき河に沿っています。平野に出るためには船橋が一本掛かっているきりで、河の一方の岸のみ沿って街が建設されてしまい、ほぼ三日月形になるような次第となりました。街は河に面した側以外はすっかり壁で囲まれています。壁はレンガ造りであり守りは堅固ではありません。というのも、堀がないからですし、……城砦の周りは、城塞を含むにもかかわらず、普通想像するほど大きくありません。3時間で容易に1周できました。騎馬ではありませんが……」。⁽⁴⁰⁾

シャー・ジャハーンが病気になると、「シャー・ジャハーン・ナバード(シャー・ジャハーンの町)」と呼ばれた宮廷城砦は、4人の皇子による帝位継承をめぐる骨肉の争いの舞台となった。その帝位継承を制し、6代皇帝の座に就いたのがアウラングゼーブ(Aurangzēb/在位1658-1707)であったが、彼の治世後はムガル帝国は衰退し、1739年にはイランのアフシャール朝の創始者ナーディル・シャー(Nadīr shāh/在位1736-47)の入城を許し、その際に世界最大のダイヤモンド「コーヘ・ヌール」など宝石を象眼した孔雀の玉座を持ち去られたと言われている。またイギリス支配に反抗して起こったインド大反乱(1857-59年)の時も、シャー・ジャハーン・ナバードの宮廷は戦場の舞台となった。

おわりに

インド・イスラーム王朝時代の建造物が世界遺産として登録されるには、それなりの理由や基準が存在しているからである。世界遺産の中の文化遺産とは、顕著な普遍的価値をもつ建築物や遺跡などを指しており、その文化遺産として登録される基準には大きく6つ挙げられる。例えば、デリー・サルタナット時代の「クトゥブ・ミナールとその他の建造物群」は、人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れたものとして、ユネスコ世界遺産に登録されたのである。それ以外の建造物では、別な理由や基準がいくつか重なって世界遺産に登録されている。

世界遺産の対象はあくまでもその時代その時代の個別の建造物あるいは建造物群であり、別々の建造物が歴史の中で結びつき、変化し、独自の建造物(城砦、モニュメント、墓建築など)となって発展していく、その過程を追うものではない。インド・イスラーム王朝時代の世界遺産を歴史を通してみると、そのつながりと変化、連続性と非連続性、混交と多様性などにより、それぞれ独自の建造物を生み出していることがわかる。もちろん、世界遺産として現存する建造物は、その時の支配者(スルターンや皇帝)の出自やその王朝の置かれた政治・経済的状况によって影響を受けている。

デリーのクトゥブ・ミナールとその他の建造物群に見られるように、初期イスラーム王朝による歴史的な建造物は、ある意味でインドの地における「支配と服従」を具現化した1つの象徴的なものと言える。クトゥブ・ミナールのモデルが、アフガニスタンのジャームのミナレットだと言われるのも、アイバクがゴール朝(アフガニスタン)のトルコ系奴隷出身の武将であったことと深く関係していると言える。またクトゥブ・モスクやクトゥブ・ミナールが建てられた場所には、もともとヒンドゥー教やジャイナ教の寺院があり、それらを壊して建造されたが、その際に得られた寺院の石柱をそのまま用いている。この事実は、トルコ人ムスリム征服者の、統治政策に見られる柔軟性や現実性を示すものという指摘がある。⁽⁴¹⁾ 確かにインド・イスラーム王朝は、スンナ派四大学派の中で最も穏健なハナフィー学派を採用している。ハナフィー学派は法解釈を行う際に個人的見解が重視され、他学派に比べ現実問題に対してより柔軟に対処する能力をもつ学派とされている。

「プラーナー・キラール」は、世界文化遺産にはなっていないが、スール朝のシェール・シャーがフマーユーンの新都造営事業を継承し完成させた、いわゆる「シェール・ガル(シェールの家)」と呼ばれた新都は、ムガル皇帝シャー・ジャハーンの新都城造営計画に影響を与えたと言われる。⁽⁴²⁾ また後にムガルの建築家は、ムガル美術の先駆けともいべき「キラール・クナ・モスク」から着想を得たと言われる。⁽⁴³⁾ その意味において、「プラーナー・キラール」はスール王朝とムガル王朝の文化を架橋する建造物として重要な意義を持つと言える。

フマーユーン廟はインドの墓建築の歴史の中では最初の大規模なもので、広大な四分庭園(チャハル・バグ)の中央に、幅90メートル近い広い基壇の上に高さ30メートルの大理石のドームを頂き、赤砂岩と大理石の組み合わせからなる巨大な墓廟である。建物は、完璧な左右対称性を備え、各面の中央にはペルシアや中央アジアで見られるイーワーン(アーチ形の開口)を置く建築様式は、以後のムガル朝の墓建築のプロトタイプとなり、「タージ・マハル」の祖型といわれる。まさにフマーユーン廟は中央アジアのトルコ系諸族の伝統とペルシア風様式、そしてインド人の民族性が生み出した傑作の一つと言えよう。

デリーの新都シャージャハーンナバードの宮廷「ラール・キラール」は、ジャムナ(ヤムナ)河畔に造営されている。図4に示めされているが、デリー・サルタナット時代中期以降、スルターン・フィーローズ・トゥグルクの首都フィーローザーバードの「コートラー」やシェール・シャー・スーリーの「プラーナー・キラール」がジャムナ河畔に沿って造営されているように、シャージャハーンもそれにならって、宮廷区域をジャムナ河畔に沿う形で造営されている。水は城塞にとっては水利・防衛上の理由から、宮廷生活においては池や噴水といった奢侈的な利用まで、多様な水の活用はイスラーム支配者が生み出した知恵であったと言える。⁽⁴⁴⁾ こうした新都城砦にせよ、世界文化遺産にせよ、デリーのイスラーム王朝の建造物はその支配者の属する文化と異文化の継承、そして土着の宗教・文化の混交・融合によって彩られたものであったと言える。

注

- (1) 荒松雄『多重都市デリー』中公新書、1993年、48頁参照。
- (2) 荒松雄『中世インドの権力と宗教』岩波書店、1989年、112-114頁参照。
- (3) イスラーム世界で奴隷を軍人として用いる例はムハンマドの時代から散見されるようである。イスラーム法上、奴隷となりうるのはイスラーム世界の外に住む非ムスリム(戦争捕虜や購入された者など)か、奴隷の子供とされている。もちろん、それは建前であり、現実にはムスリムであれ、征服された民であれば、奴隷になりうる。ムスリムにとって奴隷を解放することは善行とされていた。奴隷の仕事の1つに軍務があり、奴隷出身の軍人のなかには将軍や権力者になった者もいた。「マムルーク朝」の項目参照(『岩波イスラーム辞典』)。
- (4) クトゥブ・モスクの列柱には、顔や胸の1部分だけ削がれたヒンドゥー女神像が残っており、天井の文様もヒンドゥー風であることから、当時のムスリム侵略者は、彼らが言う異教の「ブドゥ・ハーナ(偶像の家)」を破壊するよりは、その資材を活用するだけの融通性を備えていたという指摘はインド・イスラームを理解する上で重要である。荒松雄、前掲書、122-123頁参照。
- (5) イブン・バットゥータ、イブン・ジュザイイ編(家島彦一編注)『大旅行記4巻』東洋文庫、平凡社、2000年、346頁。
- (6) ロミラ=ターバル(辛島昇・小西正捷・山崎元一共訳)『インド史2』みすず書房、1972年、117-118頁参照。
- (7) イブン・バットゥータ、前掲書、346頁。
- (8) William Foster, *Early Travels in India 1583-1619*, London, 1921, reprint, New Delhi, 1985, p.308. イギリスのインド史研究家、フォスター(William Foster, 1863-1951)は、その主著『インドの初期旅行記』(*Early Travels in India 1583-1619*, 1921)で、ムガル帝国の皇帝、アクバルとジャハーンギール支配期の北西インドに旅行した7人のイギリス人の見聞記をまとめている。
- (9) 宮原辰夫『イギリス支配とインドムスリム』成文堂、1998年、32-37頁参照。
- (10) マルコ・ポーロ(愛宕松雄訳)『東方見聞録』平凡社、1970年、192-96頁参照。
- (11) イブン・バットゥータ、前掲書、346-347頁。
- (12) 神谷武夫『インド建築案内』TOTO出版、45頁参照。
- (13) イブン・バットゥータ、前掲書、358-359頁。
- (14) 前掲書、360-361頁。
- (15) ロミラ=ターバル、前掲書、106-107頁参照。イブン・バットゥータ、前掲書、360-362頁参照。ラズィヤの墓はヤムナ河から約3マイル離れたブルブリー・ハーナにあるという。
- (16) イブン・バットゥータ、前掲書、347-348頁。
- (17) 前掲書、393頁参照。
- (18) 前掲書、374頁。
- (19) 舅と娘婿の関係は、アラーウッディーンと妻との不仲によって、両者に不信感と敵愾心を生み出し、ついに舅で叔父のジャラルッディーンの暗殺へと向かうことになる。前掲書、374-377頁参照。
- (20) イブン・バットゥータ、イブン・ジュザイイ編(家島彦一編注)『大旅行記5巻』、198-199頁。
- (21) 前掲書、126-127頁。
- (22) 前掲書、198-199頁参照。荒松雄『中世インドの権力と宗教』、61-66頁参照。
- (23) ベルニエ(関美奈子・倉田信子共訳)『ムガル帝国誌』、1993年、岩波書店、180頁。

- (24) P.N. チョプラ(三浦愛明訳)『インド史』法蔵館、1994年、103-104頁参照。
- (25) 荒松雄『中世インドの権力と宗教』岩波書店、1989年、1-2頁参照。
- (26) 間野英二『バーブル・ナーマの研究Ⅲ 訳注』松香堂、1998年、xxv、226-238頁参照。
- (27) 前掲書、xxxi参照。
- (28) 前掲書、466-467頁。
- (29) 前掲書、467頁参照。
- (30) 山田篤美『ムガル美術の旅』朝日新聞社、1997年、19-20頁参照。
- (31) 間野英二、前掲書、471-472頁。
- (32) 前掲書、472頁参照。
- (33) 前掲書、xxx頁参照。
- (34) 前掲書、621頁。
- (35) 山田篤美、前掲書、30-36頁参照。
- (36) 間野英二、前掲書、466-467頁参照。
- (37) 山田篤美、前掲書、31-32頁参照。設計は中央アジアで活躍した建築家ミラク・ミールザー・ギヤース(Mirak Mirza Ghiyas)による。
- (38) 荒松雄、前掲書、82-83頁参照。
- (39) 荒松雄『多重都市デリー』、122-123頁参照。
- (40) ベルニエ、前掲書、201-203頁参照。
- (41) 荒松雄、前掲書、122-123頁参照。異教徒の神殿・寺院ゆえに「破壊」の対象となったのか、それとも異教徒のものであれ、同教徒(イスラーム)のものであれ、新しい支配者が旧支配者に服従を強いる見せしめとしての行為であったのか、議論の分れるところであるが、荒松雄はその後ムスリム征服支配下のインドの地方において、多くのヒンドゥー・ジャイナ教寺院がほとんど破壊されずに残っている点を指摘しており、後者の立場に立っている(荒松雄『インドと非インド』未来社、25頁参照)。
- (42) 荒松雄『中世インドの権力と宗教』、83頁参照。
- (43) アンドレ・クロウ(岩永博 監訳/杉村裕史 訳)『ムガル帝国の興亡』法政大学出版局、60頁参照。その中で著者は、そこからほど遠くない場所にある「ジャーマ・マスジッド」は「キライー・クナ・マスジッド」と極似したものだと指摘している。
- (44) 荒松雄、前掲書、83-84頁参照。